

英国ガーデニングの変遷1991～2006

岩本 陽児

(和光大学 現代人間学部 心理教育学科 准教授)

<和光畑世話人、RHS会員、RBG・KEW友の会員>

iwamoto@wako.ac.jp

はじめに

私は1991年から2002年まで南英バーク州の州都レディング市に居住した。その後も定期的に同所の住まいに滞在し、2006年まで園芸を楽しんだ。そこで、本稿の視座としては、いかにして英国ガーデニングが今日的な展開を見るに至ったかを、英国社会の変遷と関連づけながら検討したい。

1、矛盾に満ちた国、英国

1991年秋の英国は不況の真っ最中だった。街の中はゴミだらけ、犬のフンだらけ。しかし、電線のない街にはふた抱えはありそうな街路樹が自然樹形に近くのびのびと聳え立ち、やや離れて見るレンガ造りの街並みはむしろ美しいと感じられた。後に、最も美しいのがカントリーサイドと知ることになるのだが、バブルの熱気冷めやらぬ日本から政府派遣留学生としてやってきた私は、彼我の落差にとまどうことが多かった。

その時点での、レディング市内の主要な園芸関連店舗を紹介しておこう。街の中心部には19世紀末の 아일랜드人作家、オスカー・ワイルドがかつて収監されていた刑務所があり、それに隣接してスーパーマーケット系のホームセンター、S社があった。この鉢物、苗ものは、やや割高だが品がいいとの評判。ちなみに、このチェーン店の経営者は、その後、産業大臣を務

めている。

次に、1970年代初めに作られた都心のショッピング・モール（英語では、「マル」と発音）の中に、切花をメインとした店舗があった。そこでディオネア・ムスシプラやアンセリウムを購入して学寮自室の南向きの窓際に置いていたが、陽あたりと窓下に据えつけられていた温水暖房機^{ラジエーター}のおかげで、アンセリウムは冬の間も次々と花茎を上げてくれた。

第三に、週の水・木・金・土に出る市場。一角に切り花を扱うテントがあり、テント前の広い歩道に鉢植えや球根、宿根草苗を並べていた。土曜日の3時過ぎになると決まって切り花の安売りを始めるこの店は、値段も品質も庶民的なところである。商品は、オランダで生産されたものが多かった。(写真1参照)。

第四に、老舗デパートH社の地階。しかし、ここはタネものと袋詰め^{袋詰め}の宿根草苗、球根に園芸用具、機材程度で、それほど魅力的ではなかった。ガーデンチェアなどは各種取り揃えてあったが、鉢物は置かれていなかった。



写真1 市場の花屋。2006年9月の撮影。15年前に比べるとはるかに規模が大きくなっている。著者撮影

第五が食品・衣料品チェーンのM社。切花とともに、室内用の鉢物を扱っていた。このほか、市街地を離れたところに何軒かのガーデンセンターがあるので、本格的な利用は車を使うようになってからのことなので、後述することとしたい。

2、繁栄の英国と、クレマチス・モンターナ

1年間の留学を終えて帰国した1992年秋の日本は、バブル崩壊後の不況のただ中^{ただ中}にあった。それから半年、1993年春に教職を得て再渡英してみると、わずか半年間に英国の経済は完全に好転しており、道路にはピカピカの新

車が行き交っていた。英国の自動車のナンバープレートは、ローマ字で登録年度を示すしきたりだが、そのローマ字はKの年であった¹。

後に私がはじめて入手した車はBレジスター、すなわち1964年製のモリス・マイナー。モギーのニックネームで英国人にこよなく愛される国民車であったことは、乗り始めてはじめて知った。なにしろ、同じ車が行き違くと、運転手が互いに手を振って挨拶を交わすのである。こういう自動車は他にはないだろう。

さて、前後するが、二か月ほど勤務校の宿舎²に滞在したところで、借家を紹介してくれる人があり、市街地のはずれに近い住宅を下見に行った。郊外型住宅によくある^{セミアタッチト}二軒長屋の家並みの南端で、隣接する芝生広場とのあいだを、板塀が区切っていた。550ポンドの家賃は当時の私の給料の三分の一。けっこうな金額だったが、その家に住むことを決めた理由が、板塀を覆った桃花クレマチス・モンターナだった。下見の日、根元の直径が5センチほどもあるモンターナが一面に花をつけ、裏庭を望む二階の窓辺に甘い香りを漂わせて、私をいざなったのである。

元住人の老婦人は、70年代にその家が建って以来20年、庭を多種多様な植物で埋め尽くしていた。新たな植え込みスペースのために芝生の四隅をはがさなくてはならないほどであったが、かくて、私は、英国に「根を下ろす」地べたを得たのであった。同所での楽しみの数々については割愛し、本稿の主題に立ち戻るとしよう。

さて、1980年代に登場したマーガレット・サッチャー首相は、^{ブリティッシュレイル}国鉄の民営化を始め、多岐にわたる社会の構造改革をもたらしたが、ガーデニングにもっとも関係が深いと私が考えているのは、^{カウンシルハウス}公営住宅の払い下げである。

ここで、簡単に歴史を振り返っておこう。

かつて世界最初の産業革命を達成して世界に冠たる国力を誇った英国では、地価もまた世界一高騰し、都市部の^{スラム}貧民窟を中心に、教育、福祉、環境、文化、衛生などにまたがる様々な社会問題を抱えることとなった³。20世紀初頭にはエベネザー・ハワードが民間ベースの田園都市建設を試みたが、実際のところ不調に終わっている。この反省を受けて、第一次大戦後には住環

境を含む包括的な環境「政策」、すなわち公権力の介入の必要性がハワード自身の後継者を含め、多くのNPOによって論議されるようになった。この議論を終始リードしたNPO、田園イングランド保存協議会(CPRE)の結成は1926年のことであり、1932年には従来の都市計画法が拡充されて都市・田園計画法となった。この流れは福祉国家建設へと向かい、厳密な建築基準を満たさない貧民窟^{スラム}の取り壊しと、それに代わる公営住宅建設へと発展して第二次大戦後にいたった。こうして作られた公営住宅は、高層住宅の場合は周囲を広い芝生で囲まれており、二階建ての場合は短冊形の敷地の道路側に建てられたが、いずれにしても低廉な料金で労働者階級に貸し出された⁴。

こうした公営住宅の払い下げに基づく持ち家政策は、サッチャー首相が推進した「小さな政府」づくりの重要な柱となった⁵。日本の習慣と異なり、英国で家は自分が建てるものではなく、すでに建っている家を品定めして買うものである。英国の住宅は造りがしっかりしているため経年劣化による資産価値の評価減ということがほとんどなく、むしろ逆。そのため英国の家庭は預貯金が少ない代わりに、家を持つことが資産形成の重要な手段となっている⁶。かつて、地方自治体が家主であった公営住宅の住民にとって、その家屋は所詮、借り物にすぎなかった。しかし、サッチャー改革によっていまや家主となった住人たちは、当然のことながら、わが家の資産価値をさらに高める方策を考えはじめたのである。

これが、経済波及効果を生んだ。ひとつが、家の内装を美しくしつらえるDIY市場⁷、そしてもうひとつが、家の前後の庭を美しく整えるガーデニングの市場である。

ひとつの例を、写真で見て

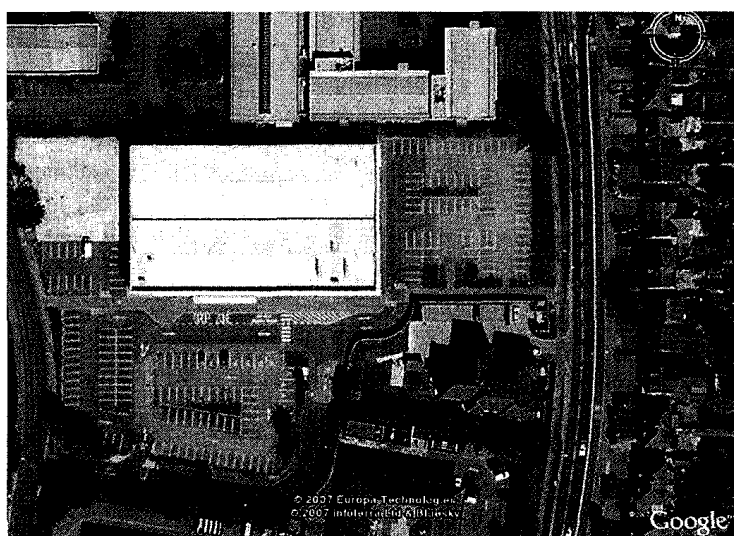


写真2 B社の旧店舗(中央の白い建物)
©グーグル・アース 2007

いただきたい。これは、DIYチェーン大手B社の旧店舗と、90年代半ばに移転した現店舗の比較である(写真2,3)。

現店舗に移ってから、ガーデニング部門を大幅に拡充していることがわかる。

歴史をさかのぼれば、路地裏園芸の伝統を持つ日本の下町庶民と異なり⁸、資本主義化が早く進み、資本家による収奪の著しかった英国

の労働者はガーデニングを楽しむゆとりを持ち合わせていなかった。サッチャー首相の持ち家政策は、労働者階級の意識の中流化を進めた⁹。家の資産価値をさらに上げるために、コミュニティ意識を高め、街区のイメージを向上させる手段として、一歩進んだ、地域総出によるコミュニティガーデンづくりも、政策的に奨励されている¹⁰。



写真3 左側の建物がB社の現店舗。中央に屋外売り場、その左が温室。店内でも芝刈り機をはじめ園芸用品を大量に販売している。右下はサッカースタジアム
©グーグル・アース 2007

3、ガーデニングとは何だろう

ここまで、ガーデニングという言葉を私は無批判に使ってきた。そろそろ、その検討に入るべきだろう。結論を先に述べるなら、これは「園芸」^{ホーティカルチャー}とは区別されるべきものだと私は考えている。

鉢を「植物および土の容器」として扱うのが園芸としたら、鉢を庭のフォーカルポイントとするのが英国ガーデニングの流儀であるといったら、雑駁に過ぎようか？英国のガーデンセンターで売られている鉢植えは、地植え(定植)を前提としているように見える。日本の園芸店で売られているポット苗のかなりのものは、植え替えられてもやはり、鉢植えとして鑑賞されているのではないだろうか？

ガーデニングには、園芸も含んだ、^{ガーデン}庭で行われるレジャー活動全般が含ま

れる。園芸には含まれないがガーデニングには含まれる事がらとして、例えば庭のテーブルでの食事、ハンモックを吊るしての休憩や読書、友人を招いてのティーやバーベキューがある。目を楽しませるためのちょっとしたオブジェを飾ったり、イトトンボやカエルを呼ぶためにマイクロ・ビオトープを設けたりすることもガーデニングの一領域となっていることを指摘できるだろう。

ガーデニングが園芸と同義ではないことは、1990年代中葉以降の、ガーデンセンターの量的・質的な拡大からも見てとることができる。すでに各種のガーデングッズ（アイテム）が日本にも紹介、輸入されはじめているから個々の例は挙げないが、チーク材や合金製の長いすやテーブル、バーベキューテーブルなどのために、種苗や（従来からの）園芸用品売り場とは別に広い売り場を設け、自作用のフェンス資材やガーデンデッキ材料まで多数取り揃えて販売しているガーデンセンターを見ると、もはやこうした店舗を「大型園芸店」と呼ぶことは適切でないように思われるのである。私の行きつけのガーデンセンター2社の、近年における拡大ぶりをご覧いただきたい(写真4、5)。



写真4 100年あまりの歴史を持つH社。ばらの育種も行っている。売り場は写真の右半分。右手、温室兼用の売り場は増築で面積が3倍になった。

©グーグル・アース 2007

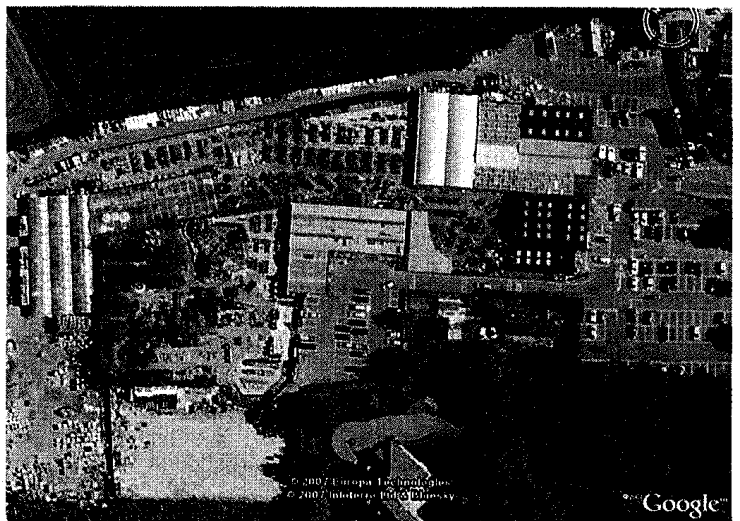


写真5 チェーン店のW社。左のかまぼこ屋根の温室では熱帯樹木のほか、ハンギングバスケットの促成も行う。この棟ができて売り場面積は倍増、中央部の、以前からあった観賞魚センターは半ば包囲される格好となった。 ©グーグル・アース 2007

4、イングリッシュ・ガーデンとは何だろう

上述の問題は、イングリッシュ・ガーデンをどう捉えるかに関わっているのかもしれない。よく知られているように、左右の対称を基本とする大陸的な伝統的ガーデンを廃し、あたかも絵に描いたような風景を三次元の地上に再現してみせたのが18世紀ジョージ王朝の建築家ウィリアム・ケントや「ケイパビリティ」ブラウン、そして彼らに続く歴代のガーデナーたちだった¹¹。現地見学の際、日本人から時に「で、ガーデンはどこですか」と質問の出る、花の咲かないイングリッシュ・ガーデンである。これもまた、要所にグロットやテンプルなど、古代神話の世界の背景をフォーカルポイントとして配置して、視点の移動に伴う景観の移り変わりを楽しむものだが、同時代日本の大名庭園の多くが徒歩での散策用に造られていたのに対し、英国の風景(修景)庭園の多く、特に古手のものは、騎馬や馬車での鑑賞を前提としていた。要はそれだけ、スケールが大きかったということである¹²。

19世紀も1830年代になって、ガラスに課せられていた高額の物品税が撤廃され、それまで王侯とひとにぎりの上流貴族の独占物であったガラス温室の普及が始まる。普及といっても、せいぜいが下級貴族か豪族や資産家^{パロネット}どまりであったろうが、ボーダー(花壇=壇をなしていないので、ボーダー花壇と言い切るには若干のためらいが私にはある=)とともに19世紀に始まった毛氈花壇^{カーペットベッド}は、ガラス温室での大量育苗によってはじめて可能になった。しかし、今日の日本で、駅前の花時計をボーダーと同時代に発明されたイングリッシュ・ガーデンと認識する人はおそらくいないだろう。

要するに、昨今の日本における「イングリッシュ・ガーデン」のイメージ¹³は、20世紀に入ってからウィリアム・ロビンソン、ガートルード・ジークル、ラティエンズ(日本では誤ってラッチェンスと表記されていることが多い)らが流行させたコテッジ・ガーデン、とりわけその一部であるボーダーを継承していると考えてさしつかえなさそうである。その背景を探ってみよう。

ジークルが活躍した時代は、産業革命の開始から約5世代を経ている。すでに19世紀半ば以降には、中世趣味者ウィリアム・モリスのアーツ&クラフツ運動が始まっていた。その頃に建てられたウェストミンスター¹⁴の議会

の建物をみると、ネオ・ゴシック洋式の「ビッグ・ベン」ほどには知られていないが、上院、下院ともにインテリアまで中世趣味で統一されている¹⁴。

少なくともジークルの時代までに、かつての農村の貧困と、場合によっては失業と同時に住まいまでも失わなくてはならなかったコテッジ住まいの農民(農業労働者)の悲惨な労働の実態は忘れ去られていた。さらに第一次大戦後には、英国の産業構造が大きく変化した。ひとつに金融資本化の進行。もうひとつが製造業の質的な変化で、産業革命時代の重厚長大型から電機、自動車等の「ライトインダストリー軽産業」へと転換を遂げている。こうした流れの中でブルーカラーの子弟がホワイトカラー化して、職住分離の郊外型住宅を求め、「通勤」の形態が発生したのが両大戦間期である。こうした新中間層の居住形態および趣味に、ジークルが提案した(すなわち、悪臭を発する豚やにわたりのいない、浄化された形での)コテッジ・ガーデン¹⁵は適合した。前記議会の内装における中世趣味はヴィクトリア女王の嗜好でもあったというが、それから約2世代を経て、同じ嗜好が社会で下方拡散したと見ることも可能であろう。

次に、ガーデンの変化と同様、「ガーデナー」の意味合いもまた、時代により移り変わっていることを指摘しておこう。

現代化を遂げる前の英国ならではの階級社会ぶりと言えるかもしれないが、ケント、ブラウン以来、歴代の「ガーデナー」たちは、建築家に起源を持ち、自分のイメージに合わせ多数の人足を指揮して大規模な庭を造る監督者であり、今日的な自ら土いじり・庭仕事を職業としたり、アマチュアとして楽しんだりするガーデナーとの隔たりは大きい。ヴィクトリア時代のカントリーハウスにつきものとなったキッチンガーデンでは化学肥料が考案され、ガラス温室では、促成栽培、抑制栽培などの技術が開発された¹⁶。ロビンソンの『ザ・ガーデン』誌は、ある意味で今日のRHSから20余万の会員向けに刊行されている同名の『ザ・ガーデン』誌よりも水準が高いと私は考える。それは、少数のハイアマチュアと専門家、とりわけヘッド・ガーデナーを主要な読者層としていたからであろう。

今日的なガーデナーが誕生したのは、両大戦間期の、まさにカレル・チャ

ペックが『ガーデナーズ・イヤー(邦題『園芸家12ヶ月』小松太郎訳、中公文庫)』を執筆した頃ではなかったろうか。この小説にしても、登場するガーデナー氏は男性であった。女性が「土いじり」を始めるようになったのは、第二次世界大戦中の食糧増産キャンペーンの影響が大きいとの指摘がある¹⁷。今でも、年配の女性で、芝刈りなど家の外回りは亭主のしごと、うちの仕事は私の分担との考えを持つ人は少なくない。ジェンダーの視点から、ガーデニングを考察することも興味深そうである。今後の論考を待ちたい。

5. 英国ガーデンの多様化と、日本の影響

私ごとで恐縮だが、私はたまたま、バラ愛好家^{ロザリアン}の三代目として生まれ、さらに高校生時代の福岡県指定天然記念物「ツクシオオカヤツリ」の調査・研究のご縁で、県下のフローラを調査して標本の裏づけのある『植物誌』刊行を目的とする「福岡植物研究会」メンバーに最年少として加えていただいた経験を持つ。そのおかげで日本原産の植物についての知識をあるていど持って渡英したから、英国のガーデンで、これは日本の原産、こういうところに自生している等、いくつかのことを現地人に指摘してみせることができたし、植物の園芸的な用途についても、例えばギボウシなどの、根メといった伝統的な日本庭園での作法と英国のその相違に興味を覚えることができた。英国滞在中、ガーデニングの勉強のため日本から英国に来ている青年たち、とくに若い女性たちと知り合う機会も多かったが、そのほとんどが、日本の植物および園芸についての知識を持っていなかったのは残念なことであったと私は思う。せめてアオキの学名ぐらいは、知っておいて欲しいと思ったことである。これでは、文化の輸入はできても、交流にはならない。

ところで、BBCをはじめ英国の各放送局では、金曜日の夕刻、いわゆるゴールデンタイムにガーデニング番組を放映する習慣である。ところが、どう見ても中国風のあずまやが「日本庭園」で紹介される場面を数度目にした。これには中国人も反発を覚えたのか、2005年のハンプトンコート・フラ

ワーショーでは、正真正銘の中国式あずまやが、中国人によって展示されていた。

英国で東洋趣味といえば、18世紀に一世を風靡したシノワズリが有名だが、エキゾチックなものへの憧れは今も昔も変わらないようである。逆に言えば、英国で労働者階級の庭にしか置かれないノーム人形が、イングリッシュ・ガーデンの必需品とばかりに日本の庭で飾られていることは、労働者階級に属しない英国人にとって、英国の大抵のガーデンセンターでセメント製「鎌倉大仏」が売られているのを見たときの我々日本人同様、やはり、奇異なことと見えるのではないだろうか。

しかし、英国ガーデニングの多様化は著しい。かつて、ボーダーといえは有産階級の好みであった。これは、労働者階級の鮮やかで原色系の色彩への格別の嗜好、すなわち春先のプリムラ・ポリアンサ、ビジー・リジーと愛称されている夏のインパチエンスなどによる庭先のべた植えと対照的に、比較的地味で複雑な色調の宿根草を大株に仕立て、地表が見えないようにバークチップで覆って土はねや雑草を防止するとともに（表土とバークの間に雑草止めの黒色透水シートを敷くことも多い）、色彩のトーンを演出することが通例であった。しかし、90年代半ばごろから斑入りや銀葉、銅葉など、草姿や葉色が面白いスゲ等が普及しはじめると、今度はバークの代わりに砂利や色石を敷き詰めて、無機質感を強調する事例が増えてきた¹⁸。雑草を抑え、メンテナンス・フリーとする狙いではあるが、これを、いわゆるイングリッシュ・ガーデン以前に一世を風靡したノットガーデンの手法のリバイバルと看做すこともできるだろう¹⁹。この種の、手間のかからない庭は、労働者階級の庭でも目にすることが増えてきた。

近年の英国の庭造りの手法を見ると、チェルシーやハンプトン・コートなどのフラワーショー会場でも、従来から見られた季節の花が素朴に咲き乱れるコテージ・ガーデンが少なくなり、水や金属、ガラスを多用して無機質感を強調するモデル庭園が増殖しているようである。これは時として、昔ながらのコテージ・ガーデンに愛着を覚える年配の人々の響響を買っている。

こうしてみるかぎり、英国の作庭の方向性は、二極分化の道をたどってい

るかのようでもある。

最後に、バラについて語っておかねば、英国ガーデニングの十分な説明とは言えまい。私はかつて、タンタウ(独)の「ブルームーン」を英国の庭で咲かせて、色の冴えに驚き、もう日本では植えまいと思ったことがある。バラに限ったことではなくダリアなどもそうだが、日本の平地と比較して、昼夜の温度差のせいか発色は良いし、花保ちも断然よい。

さて、かつて、英国内でもヒッチンのハークネスやアイルランドのマグレディなど、世界に冠たる名門ファミリーが、剣弁高芯で花首が強く、花卉が厚いコンテスト用の品種を続々と発売してきた歴史がある。これらは、自動車に喩えるならレーシングカーのようなもので、最高に手をかけることによって最高のパフォーマンスを発揮させることができる。ただし、花が開ききると姿が行儀悪く見えるから、本来の美しさを発揮するのは比較的短期間である。

ところが、趣味は時代によって変わるもので、1970年ごろから細々と、古風なバラを発表してきたデイビッド・オースティンが、今日、その独特の万重咲きのぼたもちバラで一世を風靡している。剣弁高芯に比べて、開きはじめが格別美しいというのではないが、花が完全に開ききっても見苦しさを与えず、花保ちがいい。しかもその、海外での最大の顧客は日本であるという。それに追随して、最近ではメイヤン(仏)やハークネスまで、万重咲きのぼたもちバラを売り出すようになった。

しかし、一貫してコンテスト、切花用のHTの改良、生産を今なお続けている業者も一方にあるのが興味深いところである。なるほど、オースティンの初期の品種、一季咲きのコンスタンス・スプライなどは、樹姿のバランスもよく、花首の弱さを逆に生かし、低い位置からの鑑賞にこれ以上の品種はあるまいと思われる。しかし、いわゆるオールド・ローズ、すなわちブルボンやノワゼットに類した花型の品種がいったん市場で飽和状態となってしまうと、再度、現代的なHTに人気が戻ってくる可能性は少なくないと私は見る。

おわりに

こう見てきて、あることに気づく。

ガーデニングは、料理と似ているのである。料理はたとえば日本料理、フランス料理、イタリア料理、中国料理と区分されているが、ヌーベル・キュジューヌやニュー・ブリティッシュに代表されるように、互いの影響は少ない。中国人に言わせれば、フランス料理はじつは中国料理の申し子だという。しかし、コースのフランス料理で皿がひとつひとつ出てくるのは、明らかにロシア伝来の作法である。また、純粋な日本料理のようであり、西洋起源の素材を使っているものは珍しくないし、日本で発明された化学調味料を加えていない中国料理の一皿を発見するのは、今や難しい。

人に、新たなもの、珍しいものへの欲望がある限り、国境を越えた文化交流は必然であり、その過程で、誇張や選択、それに思い違いはつきものだろう。優れて文化的な営為であるガーデニングも、その例外ではなさそうである。



写真7 レディング駅脇のオフィスビルの道路側に、2000年紀の到来を記念して作られたメンテナンス・フリーの「石庭」。これにZENを感じる英国人がいるのかもしれない。2006年9月、著者撮影

謝辞

The author should like to thank Ms Anne Jennings at the Museum of Garden History for her invaluable information for this article. YI

参考文献

- 1 日英の経済動向については、OECDの統計が参考になる。
- 2 19世紀から20世紀にかけて、世界最大のビスケット工場のオーナーであったP氏の邸宅の一部が宿舎のアパートになっていた。付属のヴィクトリア朝シダ温室は、BBCの園芸番組で紹介されたこともある。
- 3 明治初年（1870年代前半）の岩倉使節団の記録に言及がある。岩波文庫『米欧回覧実記 第二巻』を参照されたい。
- 4 中島明子『イギリスにおける住居管理』東新堂（2003）は、住宅ストックの改善の重要性に重点を置いているが、通史に関しても参考になる。
- 5 これには、居住年数が長いほど、その家を割安に購入できるという特典もあった。
- 6 たとえば木野悍『頑固な英国ソフトなイギリス』実業之日本社（2003）を参照いただきたい。
- 7 英国の調査会社Mintel International Group Ltd.（本社：ロンドン）では、英国におけるDIYの市場を詳細に調査・分析した調査報告書 "DIY - The Consumer - UK -September 2004" で、英国は欧州の中でDIYの実行率が最も高いことを明らかにし、これが確かな基盤をもつ市場であり、100億ポンドの大台をはるかに超す価値をもつと結論づけている。
- 8 幕末の来日外国人の観察が引用されることが多い。これについては、稿を改めて論じたい。
- 9 これは、別の場面でも看取することができる。1992年の高等教育改革により、多数の専門学校（コレッジ）が大学（ユニバーシティ）に昇格し、その結果、大学数・大学生数ともに倍増したことなど、その一例であろう。
- 10 私見では、家の外回りに関するガーデニング、内装のDIY、それから、対外的には海外観光客誘致をかねたニュー・ブリティッシュ料理の宣伝、国内的には肥満・高血圧対策のための食生活改善キャンペーンは、BBCその他のメディアを動員して取り組まれ、一種の国策である。料理、ガーデニングに共通して、日本を含むアジア的なものの影響が顕著に

認められることは興味深い。前者の代表格がSushiであろうか。

- 11 初期のランドスケープ・ガーデナーが建築家から生まれたことは興味深い。彼らの事跡の紹介については、『BISES(ビズ)』2号~27号の拙稿とくに2000年(6~9号)の連載「英国庭園の旗手たち①~④」を参照いただきたい。<プレジデント社、後にベネッセコーポレーション刊>
- 12 ある知人は「いま、日本でイングリッシュ・ガーデンが流行している」と旅先で英国人に話したところ、「イングリッシュ・ガーデンといえば、門から屋敷まで何マイルもあるものだ。しかるに日本は土地が狭小だと聞いているが」と慇懃にいやみを言われたと、こぼしていた。
- 13 赤川裕(2004)は「(海の向こうのイギリス庭園をリアルにお茶の間に運んでくれる)お手ごろ価格の大型雑誌」が、「いわゆる『イングリッシュ・ガーデン』ブーム」を加速したと指摘している。岩波アクティブ新書『英国庭園散歩』。(なお、本書にはナショナル・トラストの創立者に関する誤解がある。)
- 14 英国議会は、毎年夏に一般公開されている。この記事は、2006年夏の見学に基づいている。
- 15 老朽化して崩落寸前のコテージを修復して、賃貸する運動も、両大戦間期に取り組まれている。(レディング大学所蔵のCPREアーカイブ参照)
- 16 BBCで90年代末に放映された『ヴィクトリアン・キッチン・ガーデン』がビデオ化されている。
- 17 ナショナル・ギャラリー企画展『女性とガーデニングの5世紀』ESCAPE TO EDEN : FIVE CENTURIES OF WOMEN AND GARDENS 2000年10月から2001年1月。同名の図書も刊行されている。その後、庭園史博物館でも、女性とガーデンの関係を問うた『彼女のガーデンはいかに育ったか?』の企画展を2002年に開催している。こちらについては *Museum of Garden History, Autumn 2002 Journal 6, WOMEN IN GARDEN ISSUE, ISSN1474-8431* を参照。
- 18 レディング市の、中心に程近い花壇(写真8)をご覧いただきたい。これには、近年、英国南部に見られる、慢性的な水不足への対処が含まれて

いるのかもしれない。この地域では2006年の夏もまた、ホース灌水が禁止された。スプリンクラーはもちろんご法度。『園芸家十二か月』を引くまでもなく、芝生が枯れ上がってしまったボーダーは、見よいものではない。



写真8 車道にはさまれた公共花壇。ラベンダーなど乾燥に強い植物を選び、砂利を厚く敷いて雑草を押さえている。

2006年9月、レディング市内で著者撮影